

留学だより

平成 29 年入局 幸田陽次郎

初めまして。平成 29 年入局の幸田陽次郎と申します。平成 30 年 7 月よりシカゴ大学太田壮美先生の下でリサーチフェローとして勤務しております。今回はこのような機会を頂きまして誠にありがとうございます。私は平成 23 年に島根大学を卒業後、出身地である新潟で初期研修を行いました。その後、心臓血管外科の後期研修を姫路循環器病センターで 3 年半行った後に、神戸大学に入局いたしました。留学については、憧れは漠然と抱いていたものの、姫路と神戸での厳しくも温かい指導医の先生方の下、目の前の臨床に手一杯で考える余裕もない。というのが、率直なところでありました。ところが、神戸大学前教授大北先生よりシカゴ大学でのリサーチフェローを打診していただき、臨床を離れること、英語の拙さ、初めての基礎研究、家族のケア等々、心配なことは多々ありましたが、案ずるより生むが易しと自分に言い聞かせて留学を決意し、今日に至っております。

シカゴ大学では、再生医療の分野において、「3D Net mold system を用いて作成した心筋ブロックの in-situ 心筋再生効果の検討」をテーマに基礎研究に取り組んでおります。内容としては、心筋ブロックを 3D Net mold system というシステムを用いて作成。ブタの右室に右開胸でアプローチし、クランプ後に全層切開を置いて in situ で作成した心筋ブロックを細胞外基質シートとともにパッチとして植え込みます。60 日後に MRI、電位測定のためのマッピング、各種染色、PCR を行って、パッチ部位の心筋再生の程度を力学的、電気生理学的、組織学的に評価する。といった実験系統です。

留学してよかったと現時点で考えていることはいくつか挙げられます。

まず第一に、様々なバックグラウンドの方々と交流を持つことができました。基礎研究では、イリノイ工科大学の MRI や組織工学専門の博士の方々、シカゴ大学の不整脈チーム、またジョーンズホプキンス大学の再生医療チームの方々と共同で研究を進める必要がありますが、そういった方たちからは自分の領域に対する熱い思いというか自負のようなものを常に感じます。俺はこういったことができる。これもできる。など、どんどん来ます。こちらの興味のあるなしなどお構いなしにどんどんプレゼンテーションしてきます。日本人はこういったプレゼンテーションを苦手としている面があるように感じますが、これは、やはり自分の仕事に自信を持って取り組んでいるからこそその産物であり、かつ、アメリカのような競争の激しい中でポジション、プロジェクト、グラントを勝ち取るためには必須のスキルなのだと感じました。黙々と仕事をこなし、誰かが評価してくれるのを待つ、というだけでは一向に誰からも評価してもらえないのであろうことを身近に感じました（もちろん目の前の仕事をしっかりとこなすことは大前提ですが）。また、太田先生の下には今後留学を目指す日本の学生、研修医、修練医の方々をはじめ、施設長や教授の方々まで、さらにはアメリカで研鑽を積まれている日本人のフェローの方々、正規のアメリカのレジデンスとして頑張っておられる方やアテンディングのポジションを得た方々など幅広い世代の方々が訪れます。そういった方々とお話する機会を私も得

ることができ、自分の不甲斐なさを再確認することがほとんどですが、非常に良い刺激となっている次第であります。

次に、家族との時間を多く持てるようになったことです。日本にいるときはどうしても、受け持ち患者のことが気にかかり、病院にいる時間が長くなってしまっていました。仕事があるからと、妻に家事、育児すべてを押し付け、それが当たり前となっていました。アメリカでは、育児に参加することもでき（妻が同じような認識でいてくれるかどうかはわかりませんが）、できるだけ子供との写真や動画を多く残し、父には何もしてもらわなかったと言われないうちに今のうちに既成事実をたくさん作るように心がけています。また、家事、育児をすることにより、妻のしんどさというの少しは理解できたように思います。口に出すとしばかれると思いますが。

他には、アメリカの文化や雰囲気を肌で感じることもできた点です。本当に様々な見た目の人が、様々な自分たちの価値観で、様々なことをして国を構成しているといった印象で、人種のるつぼやサラダボウルといった言葉は的を射た表現だなと納得しています。もちろん人種差別といったことはあるのですが、アメリカには他文化、他人種に対する寛容さや慣れを持っていると感じます。また、全体的にスケールが大きいせいなのか、小さいことが気にならなくなります。爆音で音楽を鳴らす車や、赤や金色ずくめのド派手なヨボヨボのおじいちゃんなど、日本では苛立ったり、思わずつつこんでしまうようなことも、不思議と受け入れられるようになってしまいました。

上記のような良かった点ばかりではなく、やはり辛い面も留学にはあると思います。一番はもちろん言語です。コミュニケーションで苦労したときの溜息はとても分かりやすく、多いです。もしかしたらまくし立てた後の深呼吸なのかもしれませんが、これにはいつも心が挫けます。なんでもっと、コミュニケーション取ることを前提に勉強しなかったのかしら、と中学、高校、大学の頃の自分に言ってやりたい気持ちで一杯です。自分のことは自分の責任なのではないのですが、子供の問題で一番悩んでいます。幼稚園に通わせるところまでは良いのですが、やはり上手く馴染めないのか、行きたくないの一転張りで泣き喚く。といったことがあります。解決しようにもこれが、アメリカにいて言語の問題があるからなのか、はたまたただ年齢的に自然なことなのか、対応に悩んでいます。もちろん、先生と上手く話し合うこともできず、ここでも自分の力のなさを嘆いています。しかしながら、こういった問題に向かって家族で話し合っ解決していく時間も大切な経験をさせてもらっている、と前向きに捉えるようにしています。

なんとかやっているうちに1年があつという間に過ぎてしまいました。私の拙い文章力では上手く表現はできませんが、留学を経験された先生方から話を聞くと、皆さんが留学して損は絶対ない、とおっしゃる意味がなんとなくわかった1年でありました。この機会を与えてくださった神戸大学に本当に感謝しております。ありがとうございました。

写真は、国立循環器病研究センター血管外科部長 松田 均先生（右）、シカゴ大学血管外科 professor Dr. Milner（右から二人目）、太田先生（左）、筆者（左から二人目）。松田先生がシカゴ大学を訪れた際の夕食時の一枚です。

